

## 日本人移民を迎えた町「ヘスス・マリア区」

伊藤 ホルヘ

(ペルー生命科学芸術学校)

### 序論

サン・フェリペ高層住宅の10階のビルから外を見渡すとグレゴリオ・エスコバード通りに毎年咲く満開の桜の木々が通りの全7ブロックを桜色に染める。

ペルーの首都リマ市内で桜の花が見られる光景は不思議なことではない。1960年代に公式に「ヘスス・マリア」と名付けられたこの地区は20世紀の初頭に多くの日本人移民を受け入れた経歴があるからである。

当時は現在よりも多くの日本人の姿が見られ、次の世代の2世は数えきれないほどの商業を進出させた。バザー、レストラン、雑貨店、パン屋、陶器店、美容室、写真スタジオ、床屋等の「日系店舗」がヘスス・マリアのシンボルであるサン・ホセ教会の周りや、同名の市場内に多く並んでいた。

筆者が思い出せる中では、沖縄系2世の玉城アウグストさんの雑貨店、山口県からの移民の小坂ファミリーの陶器店、福島県からの移民だった佐藤ファミリーのバザー店、福岡出身の西さんの美容室、島袋食堂、永留、丹地、沖縄移民であった安谷屋、比嘉さん家族のパン屋さん等と、多くの日系のお店が町中に活気を与えていた。

そんな日本人をペルーに招いたのは、「移住」という現象よりも、契約移民の名を持つ「出稼ぎ」という海外で貯金を貯めてから帰国するという目的に過ぎなかった。よって、農業仕事は一時的な仕事として行い、契約が終わり次第首都リマに移る者が多く、また、労働状態に耐えられなかった者も逃げ出すように、首都の日本人コミュニティに助けを求めて、自分らで仕事を探すのであった。日本に帰国する者、病気等で亡くなる者も多く、決して楽な海外労働ではなかったが、年月が経つと、ペルーに入って来た労働者たちは故郷から花嫁を呼び寄せてペルーで結婚し、子どもを授かり、後に子どもたちの教育面に関する課題が出始めた。

増加する日本人家族の子どもの教育問題に応えるように、日本政府の手助けで、1920年の11月18日に将来ヘスス・マリア区になる土地で、日本人学校「リマ日校」が設立される。インフラ、教育方針からして、当時ペルーの

最先端の教育機関となり、勤勉で、正直で、優秀な 2 世の学生を多くペルー社会に羽ばたかせた。

しかし、第二次世界大戦勃発と共に、ペルー政府は日本を敵国とみなし、反日運動も街中で目立つようになる。最終的には「リマ日校」の強制収用をもたらしたが、極めて困難な状況中日本人の強制収容所への送還等により、離れ離れになる家族が後を耐えなかったが、それでも根気強く生き抜く精神を日本人は子どもたちに教えていた。

そんなリマ日校の卒業生でヘスス・マリア区に長年住み着き、日系ペルー社会にも大いに貢献し、「ヘススマリアーノ」区民として生涯を終えた 2 名の日系 2 世に焦点を当てたいと思う。

## 田中理髪店

契約労働者としてペルーの大地にたどり着いた移住者は、生計を立てるために契約が終わると首都リマ市に向かい、新たな事業を起こすのが主流であった。当時特に目立ったのは日本人の営業する理髪店であった。ペルー社会の紳士層から受け入れられた日本人の理髪店には、日本人特有の手先の器用さと、仕事に対する思いやりや真面目さが重要であったとされる。ペルーのとある作家は日本人理髪店について、「リマ市民として、日本人美容師に髪を切ってもらわないと」と書いているほどである。日本人の理髪店は 20 世紀前半に全盛期を迎えたが、1960 年代までには大幅に減少し、世紀終わりから 21 世紀の初めにかけて、最後の日系理髪店がヘスス・マリアに残った。それがリマ日校の卒業 14 期生で日系 2 世の田中 アウグスト 憲康（のりやす）さんの「田中理髪店」であった。

筆者も幼い頃に田中理髪店に 1 回連れて行かれた記憶があるが、落ち着いた子供でもない子供であったため、床屋の経験があった祖父に髪を切ってもらっていた。大人になり、90 年代から常連として田中さんのお店に通い始めた頃の会話中に熊本出身の父から剃刀と髭剃りを教わったことを懐かしく語ってくれたことを今も覚えている。

50 年代、60 年代、70 年代と田中理髪店の全盛期から末期を見ることができた。元々いた 6 人の美容師も、90 年代に入ると水色の理髪店ユニフォームを着ている者は田中さんを含めて 2 人であった。また、田中さんは朝の 8 時から夜 21 時まで、365 日休むことなく働いていた。

田中さんはとてもおしゃべりで、笑顔の絶えないフレンドリーな方だったのを覚えていたが、90 年代の田中さんはかなり静かで、3 年ぶりに会った際には、「フジモリ大統領が任期を終えるまではカットの料金は 15 ソーレス

（大体 500 円）から値上げすることは絶対にしない」と誇り高く強調していた。しかし、フジモリ大統領の任期が終わったにも関わらず、筆者に対して、ワンカットの値段は相場よりも低い 15 ソーレスのまま生涯貫き通した。

ある日、カット中に田中さんから興味深い話を聞くことができた。リマはスペインの支配下以前の時代から人口が多かったが、スペイン人が辿り着くと彼らの誤った進歩の概念を促進したため、田中さんが子どもだった頃にはこの地区ではスペイン人から破壊されたワカ（考古遺跡）を見つけることは珍しくはなかったそうだ。ちょうど田中さんのお父さんの理髪店から 100 メートルの場所にリマ日校の学生がよく遊ぶワカがあったそうで、かくれんぼや、遺跡を走り回ったりしていたが、いつか、頭蓋骨を見つけ、そのままサッカーボールのように蹴り回って遊んだというのだ。そんなワカの遺跡もこの話を聞いた頃には残っておらず、自動車修理店の土地となっていた。

田中さんの最も年長の常連客はおそらく瀬戸さんであったと思われる。瀬戸さんは、広島県出身のスリムな紳士で、娘さんはフジモリ政権の教育副大臣を務めている。瀬戸さんは田中理髪店から半ブロック離れた家に長年住んでいて、ヘスス・マリアから引っ越した後も田中さんのお店まで足を運び続け、105 歳で亡くなるまで通い続けたという。

田中さんは 2014 年に静かに息を引き取ったが、筆者にとっても夜の 9 時まで街を照らす田中理髪店の灯りや、朝に田中さんのパン屋にゆっくりと歩いて向かう姿等、亡くなる寸前までの日常的な風景を懐かしく思い出す。

幸いなことに、田中さんは 2012 年にリマの伝統的な街を紹介するテレビ番組でヘスス・マリア区の「日系最後の美容師」として取材を受けていて、番組内ではこの地区と日本人の歴史的な関係について深くピックアップされた。間違いなく田中さんはペルー日本人移民史の中の「理髪店」という分野で最後の記録と記憶に相応しい人物だったのである。

## 伊藤医師の診療オフィス

60 年以上も続いた田中理髪店の正面に、二階建ての一軒家があるが、そこは 1950 年代から 1978 年まで筆者の父、伊藤 ルイス 力（つとむ）医師の診療オフィス兼住宅であった。玄関から入ってすぐ左の部屋が診療オフィスであり、ほとんどの患者は日系もしくは日本人の方であった。日系企業の商社の役員の方々も多く、「リマで健康上に何か問題があれば、日本語が読み書きできるドクター伊藤に診てもらうことをおすすめするよ」と評判であったようだ。

戦後、日本人の息子として、大学に入学し、医学を専門にすることは容易なことではなかった。そんな困難な時代にリマ日校 10 期生の父は医師になることができた。実のところ、父は医学に元々興味があったわけではなく、異国ペルーで 5 人の子どもを育て上げた両親の勧めに応えるように、特に喘息持ちの母に心配を与えないようにと、努力して国の認める医師の資格を手に入れたのである。父は読書と書くことが大好きで、日本語なら尚更と言える。特に歴史に興味があり、60 年代後半には書齋には約 1000 冊を超える立派な個人図書館ができていて、それが父の誇りであった。診察の予約のない日は一人部屋に籠って読書に没頭していた。

1970 年に父は、1950 年に創立された日系ペルーのコミュニティのメディア機関である、ペルー新報社の日系 2 世として初の社長に任命された。同時に、ペルー新報社は日本人のペルーへの移住 75 周年に向けて、移住とコミュニティの歴史をまとめた本の出版プロジェクトを立ち上げ、日系記者の呉屋勇さんと、斎藤千仁さんの 3 人での制作活動を開始した。父は医師とジャーナリストの二足の草鞋を履く事になる。覚えている限りでは、父は海岸、山脈、ジャングル地方等に向かい、移住の歴史の鍵を握る移民当事者への取材や情報収集のため家を空ける日が多くなっていた。

1974 年にペルー新報社から出版された「在ペルー邦人 75 年の歩み」と題されたその本は、当時の購読者、主にスペイン語でニュースを読むことが困難だった 1 世の方々を思って書かれた書物となった。後に緑色の表紙から「Libro verde (緑の本)」として日系コミュニティに親しまれるこの本は、ペルーの日本人移住の歴史をまとめる重要な文献になり、次の世代の研究者たちの調査の基盤となった。この本の最大の特徴は、1899 年から 1923 年までの契約移民でペルーに渡った日本人移民の詳細なリストを示していることである。出身地、船の名前、出発日、到着日、労働先が記されているため、若い日系人たちも自分らのルーツ探しをすることが可能となった。また、日系社会内の有名な人物の日常生活や興味深い逸話を「こぼれ話」としても紹介しており、大変人気があった。

本を書く際に、国内にある文献や訪問先でのインタビュー調査をメインにしていたが、聞いた話だと当時ペルーの国立図書館に眠っていた戦前の邦字新聞や、アーカイブにも目を通して締め切りまでに間に合うように出版の準備を進めたようだ。本の出版に参加した日系ジャーナリストの斎藤千仁さんも、個人のコラムにて、「伊藤社長からは国立図書館には日系移民の歴史に関するたくさんの宝物が眠っていると聞いたことがある」と記載していたが、おそらく父は研究を続けて将来には「緑の本」を超えるような本を世に出すことを考えていたが、1978 年に 54 歳で他界したためその夢は実現できなかった。

時が経つにつれて、父が移住 75 周年を記念して書いた本は日系コミュニティでは伝説の本となり、再出版もされていないため、入手すること自体が難しく、また、そのほとんどが日本語で書いてあったため、ペルーの日系社会の日本語が読めない 2 世、3 世、4 世からしてみたら、手に取って読んでみることに事態が極めて困難であったが、出版から 40 年の月日が経とうとしていた頃に、日系社会の知識人を率先して、松田サムエル氏（両親は沖縄県出身）が「緑の本」のスペイン語翻訳を出版するプロジェクトを開始し、2014 年に日秘文化会館の劇場で正式に発表され、そのおかげで本の出版者の目的であった、次の世代に日本人移民の歴史を伝えるということが達成された。

## 終わりに

日秘文化会館の建つ土地は、第二次世界大戦中にリマ日本人学校の強制没収の償いとして、ベラウンデ大統領が日系コミュニティに譲った土地である。約 1 万平方メートルの面積を占めるこの土地は、1967 年 5 月 12 日に開会式を行い、当時の天皇太子やフェルナンド・ベラウンデ大統領も出席した。日本政府、日本の民間企業等の強力で「日秘劇場」や、「日本人ペルー移住史料館 “平岡千代照”」、小波津エレナ図書館等と続々と日系施設がヘスス・マリアで出来ていき、1981 年には日秘総合診療所、移住 100 周年を迎えた 1999 年には佐倉丸でペルーに渡った先駆者 790 名の名前が記された「ペルー・日本友好橋」がヘスス・マリア区内にあるカンポ・デ・マルテ公園内に建てられ、毎年 4 月 3 日の「ペルー・日本友好の日」には、その場で式典を行なっている。また、ペルーの日本大使館の事務所もヘスス・マリア区内にある。

今年は日系コミュニティの長年にわたるペルーでの社会貢献を称えと共に、移住 123 周年、日秘友情の橋の設立 33 周年を祝って、日秘文化会館で大きな式典が行われた。当イベントの中で、リマ市のホルヘ・ムニョス市長は日秘文化会館の創立が日本とペルーの二国間系の強化に大きく働きかけたことを強調し、「日系社会と日本文化の影響なしでのペルー、そして都市部は想像できない。特に日系の方々からの社会的な協力、援助活動は多大で、コロナ禍で社会問題が困難な段階に突入した時も、日秘文化会館のご協力を経て、ペルー国民の心に感謝の気持ちが残る貢献をしていただいた」と伝えた。

ヘスス・マリア区のホルヘ・ルイス・キンタナ区長は、両国関係の発展に繋がるコミットメントを公約し、「相互の友情関係は日々強化されている。ヘスス・マリア区では、日本食や、区のシンボルでもある桜の花といった日

本文化が馴染んでおり、引き続きこの関係がより強まることを願っています」と指摘した。

これは、1世紀以上にわたるこの地にたどり着いた日本人と、彼らを受け入れた町、そしてその子孫が引き継いだ社会貢献から生まれた現地人の温かい言葉であり、日系社会がこの地区から高い評価を受けていることを表す証でもある。田中さんや父のようにヘスス・マリア区に住み着いた日系の先駆者には心から感謝の意を表したい。